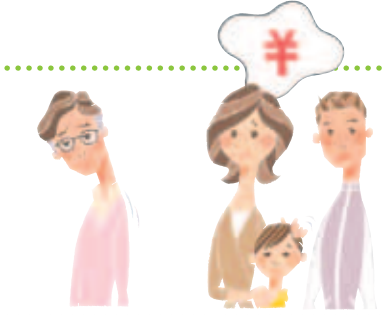
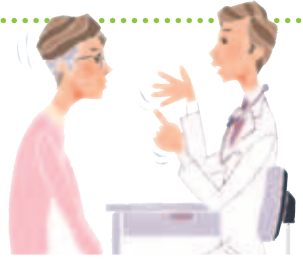


若年性認知症とはどんな病気なのでしょう？

Aさんは60歳でアルツハイマー病と診断されました。認知症は、一般的には高齢者に多い病気ですが、65歳未満で発症した場合、「若年性認知症」といいます。



本人や配偶者が現役世代なので、認知症になって職を失うと、経済的に困ることになります。また、親の病気が子どもに与える心理的影響も大きく、教育、就職、結婚などの子供の人生設計が変わる場合もあります。

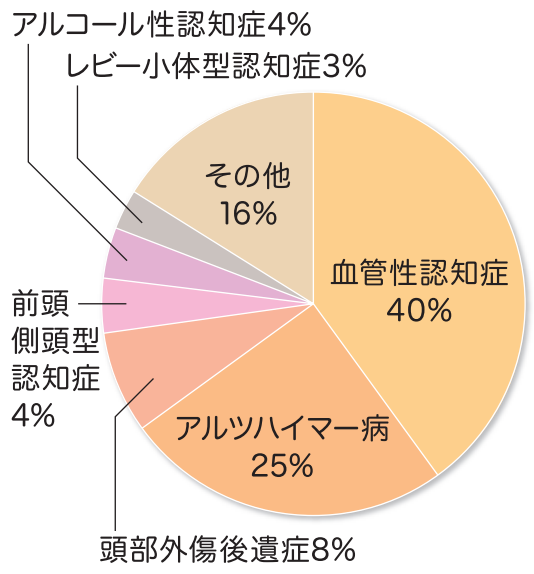
本人や配偶者の親の介護が重なる場合には、介護負担がさらに大きくなります。介護者が配偶者に限られることが多いので、配偶者も仕事が十分にできにくくなり、身体的にも精神的にも、経済的にも大きな負担を強いられることになります。




全国の若年性認知症の数は約37,800人です（平成21年3月発表）。認知症高齢者は、現在約300万人以上ともいわれているので、それに比べれば少ない数です。高齢者の認知症は女性に多いのに比べ、若年性認知症は男性に多いのが特徴です。

原因となる疾患は、血管性認知症が40%と最も多く、次いでアルツハイマー病（約25%）です。発症年齢は平均で51.3歳であり、約3割は50歳未満で発症しています。発症から診断がつくまでに時間がかかる場合が多いといわれています。

若年性認知症の原因となる疾患




若年性認知症とはどんな病気？



なぜ診断が遅れてしまうのでしょうか？

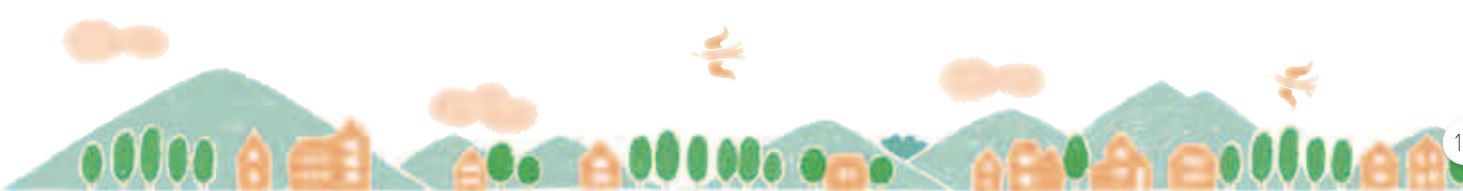
若年性認知症の場合、多くの方が現役で仕事や家事をしているので、認知機能が低下すれば、支障が出て気づかれやすいと考えられます。しかし、実際には、仕事でミスが重なったり、家事がおっくうになっても、それが認知症のせいとは思いません。疲れや、更年期障害、あるいはうつ状態など他の病気と思って、医療機関を受診します。誤った診断のまま時間が過ぎ、認知症の症状が目立つようになってからようやく診断された例も少なくありません。



 **65歳未満の人も認知症になる場合があることを理解してください。**

若年性認知症とはどんな病気？

▼なぜ診断が遅れてしまうのでしょうか？





アルツハイマー病は

事例紹介

記憶力の低下と異常な行動が始まり…

Cさんは51歳の女性で専業主婦です。ある年の3月、「夫が隣の家の女性と散歩に出かけた」と言い出しました。これが、夫が異常に気づいた最初の出来事です。**記憶力が低下**し、食事の用意がきちんとできなくなり、徘徊することもありました。だんだんと、他の家事もおろそかになるとともに、朝方、**興奮状態**で、近所の家々のベルを鳴らすようになりました。また、物を隠すようにもなったため、夫に付き添われて病院を受診し、検査のため入院しました。



実は、これは今から約100年前の患者さんの話です。病名のもとになった、アロイス・アルツハイマー博士が診た最初のアルツハイマー病の患者さんです。

このように、アルツハイマー病は記憶が薄れていくのが主な症状で、いわゆる物忘れが起こります。記憶の低下以外にも、判断力が悪くなり、物事の段取りがうまくいかない、日付や時間、自分がいる場所や、部屋の間取りがわからないなどの見当識障害、言葉が出てこないの「あれ」「それ」などの代名詞が増える、お金の計算ができないなど様々な症状が現れます。

あれ

それ



このような症状がいつとはなしに始まり、少しずつ進行していきます。しかし、初期であれば、手足の麻痺や、ろれつが回らない、手が震えるなど、他の認知症の原因疾患で見られるような体の症状は見られません。

ですから、家族や周りの人が本人の変化に気づきにくく、本人も不調を感じることや、仕事にミスが出たりすることはあっても、アルツハイマー病であるとは思いません。まずは、これまでとは違うことに早く気づくことが大切です。

どんな病気ですか？

アルツハイマー病への対応

アルツハイマー病では、治療とともに、家族の対応が本人の気分や症状に大きな影響を及ぼします。

物忘れなどの主な症状に対しては、薬が使われますが、認知症の行動・心理症状といわれる、それ以外の様々な症状に対しては、家族や周りの人の対応や、暮らしの環境、身体疾患の有無などが大きく影響するとされています。

たとえば、アルツハイマー病では「取り繕い」といわれる症状が見られます。何か質問されて答えられない場合に、事実でないことをうまく取り繕って返事をする場合があります。聞かれたことに「知らない」とは言いたくない、あるいは、相手によく思われたいといった心理状態の表れかもしれません。このような場合に、家族が「それは間違っているでしょう」という反応をすると、本人は理解ができず、非難されたという不快感だけが印象付けられます。しかし、本人に合わせて「そうだね」と共感することで、気持ちを落ち着かせることができます。

アルツハイマー病では、アリセプトという1種類の薬が長く使われてきましたが、平成23年の春からは、これに加えてさらに3種類の薬が使えるようになりました(43~44ページ)。これらの薬は、病気の進行を緩やかにするものですから、なるべく軽いうちに治療を始めるのが理想的です。

早く気づいて、早く治療を始めれば、進行を遅らせることができ、日常生活もしやすくなります。また、将来のことや財産管理など、家庭内の重要なことを家族と話し合ったり、決めたりすることもできます。本人だけでなく、家族にとっても、早期発見・早期治療は、メリットがあります。



血管性認知症は



事例紹介

エリート営業マンのDさん、突然倒れて…

Dさん(男性)は41歳、機械会社に勤務するやり手の営業マンで、40歳前の若さで支店長に抜擢されました。ある冬の夜、右半身マヒ、意識もうろう状態で倒れているのを発見され、入院しました。**くも膜下出血**です。手術で命は取り留めましたが、脳梗塞を併発し、記憶や判断、計算能力の障害が加わりました。リハビリにより、手足の麻痺は、身の回りの動作ができるほどまで回復しました。**Dさん**は独身で、家族がいません。入院していることが理解できず、明日にも仕事に復帰できると思っています。しかし、集中力、記憶力が低下し、判断力も十分でなく、書類1枚満足には書けない状態です。会社の社長は好意的で、復帰の道を探ってくれました。しかし、管理職であった人に単純労働をさせられない、名誉職にするには若すぎるなどの理由でうまくいきません。とりあえず、社会復帰を目指す別の病院に転院することになりました。



血管性認知症は、脳梗塞、脳出血など、脳卒中が原因で起こる認知症です。

若年性認知症の原因疾患の中では最も多く、約40%とされています。

脳卒中の原因のうち、脳出血とくも膜下出血を合わせると、約55%となります。

血管性認知症では、脳血管障害の再発予防が最も大切です。糖尿病、高血圧症、高脂血症など、生活習慣病にならないよう予防すること、すでにかかっている場合は、それらの治療も必要です。



どんな病気ですか？

血管性認知症への対応

手足の麻痺やしゅべりにくいなどの症状がある場合は、適切な環境でリハビリテーションを行います。日常生活でも、転倒しないよう注意をします。

アルツハイマー病と比べて、血管性認知症では言葉がしゃべりにくい反面、人格は保たれており、相手の話は理解できるので、何気ない言葉が、本人を傷つける場合があります。そうすると本人のプライドに傷がつき、介護者との間に溝ができてしまうことになります。

本人の人格を尊重し、ていねいに対応することが大切です。



本人の人格を尊重し、ていねいに対応



前頭側頭型認知症(ピック)

事例紹介

前頭側頭型認知症と診断されたEさん、妻は妹や母の介護もしています。

Eさん(男性)は51歳で**前頭側頭型認知症**の診断を受けました。川に不法投棄をする、冷蔵庫の中身を捨ててしまう、偏食があり甘い物しか食べないなどの異常行動があります。介護をする妻との2人暮らしですが、妻は、実家にいる障害者の妹と、心疾患を持つ母親の面倒も見えています。Eさんは**障害年金**を受給していますが、家のローンも残っており、経済的に厳しい状況です。家計の足しに妻も働きたいと考えていますが、持病があるので働けず、貯金を取り崩して生活費としていて介護サービスも受けられません。



前頭側頭型認知症は、脳の前方部分に変化がみられる病名で症状に次のような特徴があります。

本人には病気であるという自覚がなく、身なりや周囲のことに対しても無関心になります。日常生活では同じことを繰り返し行う「常同行動」がみられます。毎日同じ時間に散歩に行く、同じものばかり食べるなどです。

一部の人には、反社会的な行為が見られることもあります。

言葉の意味が分からなくなり、物の名前が出てこない、文字の読み違いといった症状が目立つ「意味認知症」というタイプもあります。

若年性認知症とはどんな病気？
▼前頭側頭型認知症(ピック病)はどんな病気ですか？



病)はどんな病気ですか?

前頭側頭型認知症(ピック病)への対応

前頭側頭型認知症では、初期には記憶が比較的保たれており、デイケアなどの決まったプログラムを覚えることができます。運動や知覚能力も保たれているので、ゲーム、カラオケ、絵画など体で覚える記憶を使うことで、認知症の行動・心理症状(周辺症状)が少なくなる場合もあります。

「常同行動」を、生活に適した方向に向けなおす方法があります。デイケアの利用などで、今までの困った「常同行動」をいったん断ち切り、新しく、より良い「常同行動」へ移行します。単純な作業から始め、段階的に複雑な作業へアプローチするのがコツです。また、繰り返し行動をさえぎったりすると興奮する場合がありますので、そうならないよう注意することが大切です。



より良い
「常同行動」
へ移行



レビー小体型認知症は

事例紹介

幻視や手足のふるえから始まったFさん

Fさん(女性)は、1年ほど前からうつ状態となり、抗うつ薬を飲み始めました。その後、旅行中に「壁に水が流れている」などの**幻視**を訴えるようになりました。さらに、「鞆の中にイヌがいる」、「絨毯の中に虫がたくさんいる」、「人の顔にクモの巣がかかっている」などの**幻視**が増えていきました。うつ症状もだんだんひどくなり、次第に体が動かしにくく、頭と足が連動しないと感じました。手足が震えたり、歩き出しの1歩が出ない症状もあります。さらに**妄想**が多く、家族の知らない架空の人物から電話があるなどといい、話のつじつまが合いません。同居する息子はイライラしてつい手を挙げてしまうこともあります。精神科を受診してアルツハイマー病といわれ、薬を出してもらいましたが、症状は変わりません。専門病院に行くと「**レビー小体型認知症**」といわれました。



若年性認知症とはどんな病気？

レビー小体型認知症とはどんな病気ですか？

レビー小体型認知症では、物忘れや判断力の低下といった認知機能障害は初期には目立ちません。

その代わりに、幻視、パーキンソン症状、睡眠時の異常行動など、特徴的な症状がみられます。

チェックリスト

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> 物忘れがある | <input type="checkbox"/> 動作がゆっくりになる |
| <input type="checkbox"/> 頭がはっきりしているときと、そうでないときの差が大きい | <input type="checkbox"/> 筋肉がこわばる |
| <input type="checkbox"/> 実際にはないものが見えるという | <input type="checkbox"/> 小股で歩く、最初の1歩が出にくい |
| <input type="checkbox"/> 妄想がある | <input type="checkbox"/> 睡眠時に異常行動がある |
| <input type="checkbox"/> うつ的である | <input type="checkbox"/> 転倒や失神を繰り返す |

※5個以上該当すれば、レビー小体型認知症かもしれません。

小阪憲司著「知っていますか？レビー小体型認知症」より(一部改変)

どんな病気ですか？

レビー小体型認知症への対応

幻視に対しては、否定せず、まずは本人の話をよく聞きます。「何も見えない」などと強く否定すると、状態が悪くなる場合があります。本人が怖がったり、嫌がったりしていない場合はそのまま様子を見るのも1つの方法です。怖がったり、興奮する場合は、介護者が共感して、一緒に追いつぐさをするのもよい方法です。

また、幻視かと思ったら、部屋が暗いため、ハンガーにかけた服が人のように見えていたという場合もあります。部屋の照明を明るくするなどの工夫も必要です。



睡眠中に大声をあげたり、手足を激しく動かしたり、急に起き上がったりします。ベッドから落ちて本人がけがをする場合もあるし、毎晩続くと家族も睡眠不足になってしまいます。これは睡眠中夢を見ているためにおこります。

対応法は、部屋の電気を明るくしたり、目覚ましの音を鳴らしたりして、自然に目を覚まさせるようにします。また、夜よく眠れるように、日中は体を動かし、一日のリズムを整えることが大切です。



小阪憲司著「知っていますか？ レビー小体型認知症」を参考とした。



高齢者の認知症とは

発症年齢が若い

平均の発症年齢は51歳くらいです。



男性に多い

女性が多い高齢者の認知症と違い、男性が女性より少し多くなっています。

体力があり、ボランティアなどの活動が可能である



今までと違う変化に気がつくが、受診が遅れる



経済的な問題が大きい

働き盛りで一家の生計を支えている人が多く、休職や退職により、経済的に困窮する可能性があります。



若年性認知症とはどんな病気？

▼高齢者の認知症とはどう違うのですか？

どう違うのですか？

主介護者が配偶者に集中する

高齢者の場合は、配偶者とともに子ども世代も介護を担うことが多いのですが、若年性認知症の世代では、子どもはまだ若く、場合によっては未成年であり、介護者は配偶者に集中しがちです。



時に複数介護となる

若年性認知症の人やその配偶者の親世代は、要介護状態になるリスクが高い世代であり、また、家庭内に障害者を抱えている場合もあり、複数介護になることもあります。



介護者が高齢の親である

子供が若年性認知症になった場合、高齢の親が介護者になることもあります。



家庭内での課題が多い

夫婦間の問題、子どもの養育、教育、結婚など、親が最も必要とされる時期に、認知症になり、あるいは介護者になることは、家庭内に大きな問題を引き起こします。

